

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

## 最善手=盤上の真理 を求めて勝負

### 現役最年少、史上初の平成生まれのプロ棋士

●棋士 四段・関西大学第一高等学校 3年  
豊島 将之 さん

昨年の春、将棋のプロ棋士養成機関である新進棋士奨励会が実施する第40回奨励会三段リーグ戦最終日に、豊島将之さんの四段への昇段が決まった。念願のプロ昇格。現役最年少のプロ棋士、史上初の平成生まれのプロ棋士の誕生と話題になった。折しも、羽生善治王将が森内俊之名人を破った第66期名人戦七番勝負が繰り広げられているさなか、関大一高に豊島さんを訪ねて話を聞いた。

豊島 将之—とよしままさゆき  
■1990(平成2)年、愛知県生まれ。2006年関西大学第一高等学校入学。現在3年生。99年に新進棋士奨励会入会、04年三段、07年4月四段に昇格し、社団法人日本将棋連盟のプロ棋士となる。



平成生まれの最年少プロ棋士は、プロ1年目から早くもその実力ぶりを見せつけている。2007年8月から10月に1敗するまで9連勝。その後も今年の1月まで10連勝。その半年間は19勝1敗で年間勝率0.714は、全棋士中3位という見事な戦績だ。

それでも、うれしかったことを聞くと「あんまりないです。悔しかったことはいっぱいありますけれど」という答えが返ってきた。

「小学生の日本一『小学生名人』を決める大会で、2年生の時に負けて、3年生でアマチュア最後の大会と決めて臨んだのですが、敗れてしまいました。その後、プロを目指す奨励会に入っていたので出場できなくなり、アマチュアではトップにはなれませんでした」

プロになるためには、奨励会三段リーグ戦で高い成績を取らなければならない。小学3年生で奨励会に入会後、5年生で一級に昇進し、すぐに11勝1敗の好成績で、史上初の小学生プロ棋士の期待がかかり、三段昇段も中学2年生の4月と史上最も速かったが、そこから壁にぶつかった。



「三段リーグ戦が苦戦続きで厳しかったです。30人ぐらいが参加し、半年間で18局対戦し、成績上位の2人が残ります。中学2年の時から5回挑戦して、2年半かかってやっと四段になりました。初めのころは全然勝てなかったのですが、高校に入ってから必死に取り組んだので、自分でもかなり力がついたなと感じました」

「悔しさをバネにして」などは、常に勝負の世界に生きている人には言うまでもないことかもしれない。豊島さんが将棋を始めたのは4歳のころ。テレビで将棋と出会ったのがきっかけだった。5歳の時に大阪に引っ越してきてからは、関西将棋会館の道場に通り、9歳でアマ六段にまで上達した。勝負勘の鋭さが若いころの谷川浩司九段に似ているといわれ、「谷川二世」との呼び声も高い。

将棋の駒に触れない日はほとんどない。対局が近づいて来ると、相手によってどういう展開になるか、途中までは大体分かるので対策を考えているという。対局が始まる前はもちろん緊張するが、プロになると三段リーグほど緊張しなくなったそうだ。

「三段リーグの時は1局負けたらすごく悔しかった。負けたら気合が入るといえる、それが結構いい方向に出ているんですが、プロの対局になると持ち時間が長くなり、試合時間が長くなると負けした後で次の対局に力んでしまい、あまりいい結果が出ないということが徐々に分かってきました」

最近あまり力まないようにと心がけているという豊島さんにとって、将棋の面白さ、奥深さとは――。

「相手との勝負が面白いし、盤上の真理を追究することも面白い。どう駒を動かしたら一番いいのか、場面ごとに最善手が存在するはずで、それを探するのも楽しい。情熱を持ってやっていたらある程度のところまでは強くなっても、そこからが難しい。対局して修正を加えていくという地道な作業が大事。自分の長所は終盤に力を発揮するところだと思っているので、そこで競り勝てるようになりたい」

豊島さんの将棋人生は既に輝かしいが、まだようやく序盤を終えたところだ。

## 時代をとらえる 映像の職人芸

### バンドのドラマーからCMディレクターへ

●CMディレクター  
黒田 秀樹 さん —社会学部 1982年卒業—

「24時間タカエマスカ」と問いかけるコピー、自ら作曲したCMソングも大ヒットした三共リゲインのテレビコマーシャル。鮮烈な映像が見る者を刺激し続ける、サントリー「ペプシマン」やマンダム「GATSBY」、資生堂「TSUBAKI」などのシリーズ。独特の表現スタイルでCF映像の流れを変えたと評される黒田秀樹さんは、音楽演奏で鍛えられた独自の感覚で、外科医のように、料理人のように腕を振るい、映像作品を作り上げる「職人」だ。



三共リゲインのCMは、30秒で24時間の戦いを表現しきった。資生堂「TSUBAKI」の場合は、たっぷりと量感ある髪が軽やかに揺れる女性の後ろ姿を追いながら、「日本の女性は美しい」というメッセージを伝えた。

「椿は一輪でもきれいだ。日本の女性は一人で咲いていても美しいという応援メッセージでもあるのです。日本人の男性は女性をほめるのが下手だと言われているけれど、恥ずかしげもなくほめようと、SMAPに女性をほめたたえる歌を歌ってもらいました。あの髪の揺れは実写で、僕の髪も長いのでいろいろ実験してみました(笑)」

関大一高時代から長髪。先生に注意されながらも、バンド活動に打ち込み、ひたすらドラムをたたいた。中学1年から友達とバンドを組み、高校生ですでにセミプロの域に達して、京阪神のライブハウスで演奏を続けた。父も親族も医者という中で、ドラマー志望の黒田さんは異色というか、ドラ息子と評されたとか。

広告業界に入るきっかけは、社会学部のゼミだった。「植條則夫先生(現名誉教授)のゼミで、3年生の時は広告表現の歴史な

黒田 秀樹—くろだ ひでき  
■1958(昭和33)年、大阪府生まれ。82年関西大学社会学部卒業。電通映画社(現 電通デック)入社。90年フリーとなり、94年黒田秀樹事務所設立。斬新な映像で一世を風靡し、日本人論としても語られた「24時間タカエマスカ」の三共リゲインのほか、サントリー、マンダム、トヨタ自動車、資生堂などの記憶に残るCM作品多数。オムニバス映画「バカヤロー! 3」、「いぬのえいが」、福山雅治、サザンオールスターズ、SMAPなどのミュージックビデオも監督。数コマ単位の映像処理で「右脳」に響く時間を演出。



どの講義を聴き、4年生になると自分たちで商品を決めてコピーを書いて発表したりしました。植條先生が講師を務めていた学外のコピーライター養成講座で受付のアルバイトをすると同時に、授業を聴講させてもらった。課題のコピーやCMの絵コンテを提出すると、毎回トップテンの中に入り、先生の評価も高かった。

クリエイティブな映像の仕事に就いて、時間をコントロールして何かを表現するのは音楽と同じだと感じたという。それはCMには音楽が重要だというようなレベルではない。「僕は広告に音楽が必要だとは思わないし、無駄な音楽はないほうがいい」。例えば、二人の人間が電話で、サヨナラ、サヨナラと言って受話器を置くシーン。「普通は、後のサヨナラを聞いて1秒ほどで電話を切るショットを編集する。その間を詰めてガチャンと切ると、二人は仲が悪く見える。3秒延ばして切ると、このサヨナラは一生のサヨナラに見える。つまり間の取り方で、人間関係がどんどん変わってくるのです」

編集によって人間関係を作っていく。黒田さんはその作業を「オベ」と呼んでいる。肌や髪に輝きを加えたり、瞳の色を変えたり、目に光を入れて意志の強さを強調したり…、その作業は確かに「外科医」に似ている。また、CMディレクターを厨房のシェフにもたとえる。

「撮影は狩猟です。いくら演出をしようと思っても、天候にも左右されるし、満足な狩りができない場合もある。獲物を厨房に持ち込んで料理するのに、良い素材なら刺し身にして、ほとんど編集しないでパッと出しても力のある表現ができる。そうでないなら煮たり焼いたりして、おいしいものを出さなければいけない。それが映像編集や音入れです。ディレクターにもいろんなタイプがいるけれど、僕はかなりこだわりの職人として認知されていると思う」

時間をかけて、一品一品を仕上げる料理人である黒田さんは、最も庶民的な媒体であるテレビ広告が好きだという。「結果として、ものが売れたり、小学生が歌ってくれたりする。作ったものが伝播して反応が戻ってくるのが速くて、世の中と関係を持っている、その時代と絡み合っている感じが好きなんです」